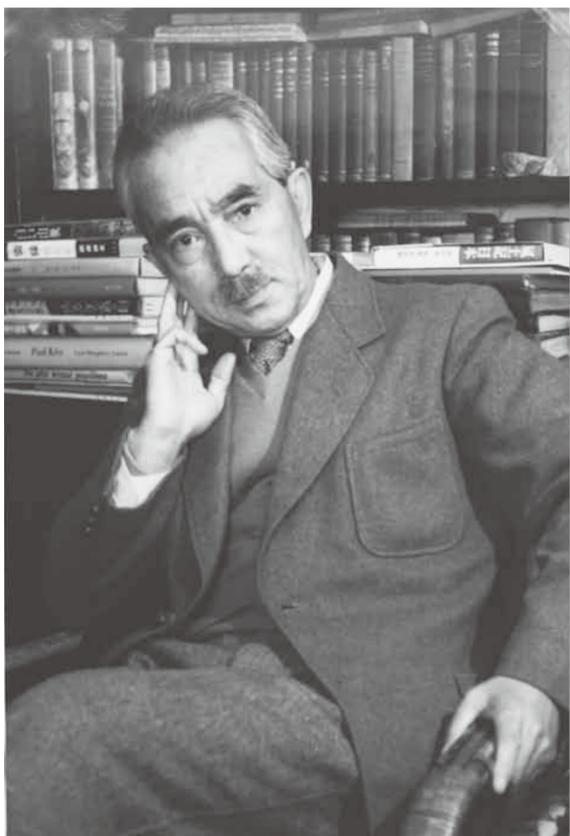




更科源蔵(さらしなげんぞう)
●1904(明治37)年、弟子屈町熊牛原野(南弟子屈)に生まれ、1985(昭和60)年に81歳で逝去。東京麻布獣医学校を中退した後、尾崎喜八、高村光太郎に師事し、詩作を中心に郷土史、アイヌ文化研究など主に文学活動を続けた。
▶弟子屈町で所蔵しているさまざまな資料を紹介する。

著書の検印などに使っていた自作のエゾシカ印



詩人 尾崎喜八

1921(大正10)年、更科は獣医になつて父の仕事を手助けしたいと考え、東京の麻布獣医学校へ入学します。しかし、熊牛原野に帰省したときに咯血(かっけつ)して休学をします。復学はしますが、1923(大正12)年の関東大震災に遭うなどがあり、学校をやめてしまいます。通学していたころ、下宿の文学青年の刺激から、更科は文学に興味を持つようになります。弟子屈では、弟子屈郵便局に勤めていた岡本清一から文学雑誌などを貸してもらい、それを面白く読んでいく程度でした。

麻布獣医学校をやめた更科は、熊牛原野で父と兄の農業を手伝い、市街地の青年たちと文芸雑誌を出すなど文化活動をしていました。1924(大正13)年の春、更科は東京時代の仲間たちと、詩と版画の雑誌を出す相談に東京へ出かけます。このとき、古本屋の店先で尾崎喜八の詩集『高層雲の下』(大正13年刊)を買求めます。この詩集を読み終えた更科は、尾崎が田園風景の自然を高らかに歌い上げた作品に共感を覚えます。

ひよんなきっかけで知り合った風変わりな農民哲学者・江渡狄嶺に、尾崎の詩集『高層雲の下』のことを話します。すると江渡は「尾崎君

なら、こんど隣に越して来たよ、会っていきなさい」と、尾崎が新築して「蒼天居」と名付けた家に連れていってくれ、紹介してくれました。このことが縁となつて更科は尾崎に師事し、詩の習作を送ります。

1925(大正14)年8月のある日、熊牛原野の更科に釧路の友人が「君の詩が『抒情詩』に推薦されているぞ」と知らせしてくれます。当時、若い詩人たちが憧れていた詩雑誌の一つで、尾崎が選者の1人となつて5人の新人詩人を推薦した中に更科の詩が載っていたのでした。更科はその詩雑誌を手に入れ、幾晩も抱きしめて寝た、といっています。

2008年、鎌倉の尾崎喜八研究会の方々が、斜里町にあるホルプ美術館を訪ねた帰り道、更科源蔵文学資料館を訪れてくれました。一行には尾崎喜八の娘さんがいらつしゃつて、更科の思い出を語ってくださいました。「家が火事で焼ける前、父の書斎の本棚には、ロマン・ローランさん、ヘルマン・ヘッセや高村光太郎さんからいただいた写真と、更科さんご一家の写真スタンドが飾られていましたよ」とおっしゃっていました。尾崎喜八は、更科の非凡な文学的素養を認めていたのでしょう。

まちぐるみでおもてなしを

てしかがえこまち推進協議会



講師の土屋さん(左)の話に聴き入る参加者の皆さん

今回は特にクレーム対応を意識したセミナーとなっており、講師はJALアカデミーインストラクターの土屋圭子さんが務めました。「お客さまからのクレームを信頼に変える対応マナー」と題して講義した土屋さんは「マナーの基本5原則」を、①身だしなみ、②表情、③態度、④あいさつ、⑤言葉遣町民全体で振興する「観光を基軸とした町づくり」の環として開催されました。この日は町内各地域からホテル旅館などの宿泊業や、飲食業などの事業者など約30人が受講しました。

今後は特にクレーム対応を意識したセミナーとなっており、講師はJALアカデミーインストラクターの土屋圭子さんが務めました。「お客さまからのクレームを信頼に変える対応マナー」と題して講義した土屋さんは「マナーの基本5原則」を、①身だしなみ、②表情、③態度、④あいさつ、⑤言葉遣町民全体で振興する「観光を基軸とした町づくり」の環として開催されました。この日は町内各地域からホテル旅館などの宿泊業や、飲食業などの事業者など約30人が受講しました。

てしかがえこまち推進協議会(会長・徳永町長)は3月27日、ホスピタリティ講座「まちぐるみでおもてなしセミナー」を川湯のホテルで開催しました。町内の事業者など約30人が受講し、観光客を弟子屈ファンにするための接遇や身のこなしなどを身につけました。

セミナーは、基幹産業の観光を町民全体で振興する「観光を基軸とした町づくり」の環として開催されました。この日は町内各地域からホテル旅館などの宿泊業や、飲食業などの事業者など約30人が受講しました。

今回は特にクレーム対応を意識したセミナーとなっており、講師はJALアカデミーインストラクターの土屋圭子さんが務めました。「お客さまからのクレームを信頼に変える対応マナー」と題して講義した土屋さんは「マナーの基本5原則」を、①身だしなみ、②表情、③態度、④あいさつ、⑤言葉遣町民全体で振興する「観光を基軸とした町づくり」の環として開催されました。この日は町内各地域からホテル旅館などの宿泊業や、飲食業などの事業者など約30人が受講しました。

てしかが一円同時期散发イベント

～TESHIKAGa・O・N・Art Fes～



多彩な催しが行われたTESHIKAGa・O・N・Art Fes(釧路新聞提供)

てしかがえこまち推進協議会(A&A部会・今井善昭部会長)は、3月9日から3週間にわたり町内の各会場で「弟子屈・円同時期散发イベント」TESHIKAGa・O・N・Art Fes」を開催しました。

このイベントは、コンサートや陶芸・羊毛・木などのワークショップ、映画の上映会、フォーラムなどの

まの記憶推進事業団 研究員の佐藤真奈美さんや、金沢市在住の通訳・翻訳家 山村秀美さんの講演が行われ、それぞれの先進的な事例に耳を傾けました。

また、地元参加者からも、地域への提言や、被災地支援の体験などに関するスピーチが行われるなど、多彩な取り組みとなりました。

多様な芸術に親しむもの。これまではバラバラに開催されることが多かった小規模のイベントを連携させることで、新たな展開やまちづくりの気運を高めることを目的としています。

初日に開催された「どあつと未来「転換」フォーラム」エコと温泉とアートと幸福論」には、町民など約60人が参加。NPO法人炭鉱(や

町から観光協会へ職員を派遣

町は4月1日から、社団法人摩周湖観光協会へ職員を派遣しました。観光商工課の館田康参事を出向させ、町の観光窓口である事業体としての立て直しに取り組みます。

同協会は、これまで長期にわたり常勤の専務理事が不在で、本来の目的達成のための取り組みがなかなかできていなかったことから、町に対して職員派遣を要請していました。町はこの要請に応える形で、課長級の職員派遣を決めました。

今後は、同協会の体制の整備はもちろん、プロモーション活動や情報発信、おもてなしの推進などのさまざまな取り組みや、てしかがえこまち推進協議会などの観光関連団体との相互連携の促進と、組織強化を図ります。